下長中

意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成

～自ら学び考え表現できるための効果的な発問の工夫～

（３年計画の３年次）

校　長　　三　浦　　一　純

１　研究主題について

昨年度は、新型コロナ感染予防対策により、様々な研修会等が予定されていたが、そのほとんどが行われなかった。そこで昨年度は、研究主題の具現化のため、授業のはじめに学習内容（ねらい）について伝え、板書等で明示するとともに、ねらいに沿ったより分かりやすい発問や明確な指示を意識した授業を行った。また、学力定着につながる学習活動の設定を模索し、その結果を確認する作業を行った。それらの実践により、生徒が意欲的に授業に臨む姿勢や、主体的に活動するための発問の工夫が髄所に見られ、学習内容もある程度定着していることが明らかになった。

一方、学校における ICT 活用は、指導する立場の教師が、まだまだ使いこなすことができていないのが現状である。昨年度は研修会を実施し、今年度も５月に校内研修を実施する予定である。今後、各教科で学期に１回タブレット端末を使って授業を行う予定である。特別な支援を必要とする生徒を含め、生徒が意欲的・主体的に活動させるために有効であるため、一層研修を進め、生徒が教育活動においてタブレットを効果的に使えるようにするために取り組んでいきたい。

授業者の意図を生徒に理解させ、「分かる授業」を展開するために、「効果的な発問の工夫」に視点をあてて指導していきたいと考えている。また、より効果的に自ら学び考え表現できるための「ICT 機器の利活用」の研修も同時並行で進めていきたいと考えている。以上の理由により、上記の主題を設定した。

２　研究のねらい

生徒の積極的な発表を促し、自ら学び、考え、表現できるようにするための効果的な指導として効果的な発問の工夫をし、生徒相互の話合いなどを通して「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業実践を行う。そのことにより、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成ができることを実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

次の３点を実践することにより、効果的な発問を工夫した授業において、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成ができるものと考える。

⑴ 授業の構成では、始めに学習内容（ねらい）について伝え、板書等で明示する。
⑵ 発問がきちんと理解されているかを確認するとともに、考えさせるための時間をとる。
⑶ 教材教具の精選や学習形態の工夫を行い、生徒が意欲的・主体的・協力的に活動できるよう働きかける。

４　研究内容

⑴ 研究主題に関わる研修を「研修Ａ」、主題以外の研修については「研修Ｂ」として実施する。
⑵ タブレット研修を実施。各教科で学期１回以上タブレットを使った授業を行う。
⑶ ローテーションに従い集中授業を行う。(諸事情により今年度は実施しないこともあり得る)

Ｒ０３年度→英語	Ｒ０４年度→国語	Ｒ０５年度→美術	Ｒ０６年度→数学

⑷ 授業参観月間の実施（５～６月）
空き時間で授業参観し、テーマに向けての実践を確認し、参観者は視点表に記録後、授業者に提出し、授業を振り返る。各教科ごとで、視点表をまとめ、データで入力後保存する。

⑸ 中教研領域発表(予定では１０月１日であったが、コロナ対策のために教員の集まりを少なくし、更に実施時期をそれぞれの部会においてずらしながら行った。)

授業者	：佐々木　昌彦　先生	視聴覚(１年理科　蒸留法における沸点の違い)
	：２学年	総合的な学習の時間(防災をとおして地域とつながる)
	：　特別支援教育	問題提起(多様な特性をもつ生徒に対する支援のあり方)

(6) 要請訪問

（１１月８日:センター訪問と同日の午後）

授業者　：荒谷　陽子先生　　英語（３年　関係代名詞）

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究授業「研修Ａ」

月	日	学年・授業者等	全体会等
4	5		全体会(共通理解)
5	5月～6月	第１回　授業参観月間	校内研修
１０	1	第１回研究授業　(中教研領域発表) １学年　授業者　教諭　佐々木昌彦 ２学年　授業者　教諭　佐々木　崇 問題提起　特別支援　渋谷　恵子	○ 研究授業 (コロナ感染予防対策をとった。視聴覚、総合的な学習の時間については校内のみで行い、ガバットのフォーラに指導案をアップしたが、特別支援は、資料を個別に配布した。)
１０	10 月～11 月	第２回　授業参観月間	校内研修
１１	8	教育指導課センター(計画)訪問、 第２回研究授業　(要請訪問) ３年　授業者　荒谷　陽子	要請訪問・指導助言　教育指導課 梅村 光江 主任指導主事

(2) 一般研修「研修Ｂ」

月	日	内容・講師・概要等
5	３１	１人１台端末タブレットの有効活用　講師　総合教育センター主任指導主事 石井 一二三　(オンライン研修)

6　研究の成果

(1) １１月に行われた教育指導課訪問では、「分かる授業」を展開するために、「効果的な発問の工夫」に視点をあてて行った。①導入段階、②展開段階、③終末段階における明確な指示と発問をすることで、生徒が意欲的に授業に臨む姿勢や、互いの考えを認め合ったり、主体的に活動したりする場面が随所に見られ、学習に効果的であることがわかった。

(2) ５月に行われた校内研修では、学校におけるタブレットの有効活用を目指してオンライン研修を行った。教師全員が、まだ十分に使いこなすことができていないのが現状であり、使い方の形態はさまざまな方法ではあるが、昨年度より多くの教科で１，２学期に１回タブレット端末を使って授業を行うことができた。

7　研究の課題

(1) 授業において参考となる点や改善点についての意見交換の場となるように、「見せ合い授業」の機会を期間に幅を持たせることで昨年度より増やしたが、新型コロナ対策や学校行事や研修会などの時期と重なり、見せ合いの授業の計画が立てづらかったため予定通りに実施できないことがあった。したがって期間に幅を持たせたり、授業参観の仕方の工夫をするなどが必要である。例えば、導入の１０分間だけでも見れるように、参観する教員は授業のクラスではワークなどの自習課題をさせるようにして、教員が一人一回見に行くような方法を教科部会のなかで設定してもらう。後でそれを持ち寄って部会で話し合う方が現実的ではないかと考えている。また、学習内容をはじめから書くのではなく、導入の段階で、生徒とのやり取りのやり取りの中で学習課題を板書するようにしていきたい。

(2) 大型 TV やモニターなどの整備も進んで来ていることから、授業での ICT 機器の活用を来年度以降も進めていきたい。また、ICT 機器が授業の中でどう活用できるか、そのためにはどんな機器が他に必要なのか、どのように使えばいいのか、一方ではセキュリティやマナーの面でもリテラシーの研修も進めていきたい。

（記入者　佐藤　孝雄）